

*Paper*Back*Factory*

Essay

Column

 Book Review



目 次

- 「手塚治虫の旧約聖書物語」全三巻 手塚治虫 集英社刊
- 「塔の条件」 引間徹 角川書店刊
- 「岬一郎の抵抗」 半村良 集英社文庫
- 「ダルタニャン物語」 A・デュマ 鈴木力衛訳 講談社文庫
- 「女探偵大研究」 キャスリーン・グレゴリー・クライン
青木由紀子訳 晶文社刊
- 「性の民族誌」 須藤健一 / 杉島敬志編 人文書院刊
- 「浮上せよと活字は言う」 橋本治 中央公論社
- 「夏への扉」 ロバート・A・ハインライン
福島正実訳 ハヤカワ文庫

REVIEW

「手塚治虫の旧約聖書物語」全三巻

手塚治虫 集英社刊

イエスが磔刑に処せられて約二千年、キリスト教社会では今も尚、死海文書の解釈をめぐる、真のイエス像を探る試みが盛んに行われている。ここ日本では、アニメーション化された旧約聖書のダイジェストが書籍になり、好評を博している。

故手塚治虫氏がイタリア国营放送 R A I に依頼された作品であることはもちろん、絶えず動き続ける中東情勢も一役買っていることは間違いない。ページの上では、画面そのままの美しい色彩で、有名無名の人物が現れては消えてゆく。まさに神と人の戦いの歴史である旧約聖書の世界を、アニメの比類なき長所である読みやすさ、分かりやすさがするする解きほぐしてくれるのだ。読み手は安心して悠久の波間に漂っていられる。

しかし、セルに描かれた人が平板であるように、原作に忠実過ぎるその解釈

REVIEW

は何一つ含みを持たせるものではない。だから、果たしてイエスは何教徒だったのかとか、本当にノアはアル中だったのかとか、あれ程強引に処女懐胎をさせてまでセックスを否定した理由は何なのかというワイドショー的な興味を満たしてはくれない。

けれども帯にあるように『西欧文明の原点』である『一度は読んでおきたい』『壮大な叙事詩』をたった三冊で堪能できる幸運を、西洋音痴の日本人は逃すべきではないだろう。

ただ、ユダヤ教と初期キリスト教が躍起になって偶像崇拜を禁止したことを思えば、何やら皮肉な状況かもしれない。

REVIEW

「塔の条件」

引間徹 角川書店刊

おれには今好きな人がいるので、ちっともワープロなんかと見つめあっていたい気分ではないが、そんな時に限って必ずスピード印刷ばりの仕事が舞い込んでくるのが世間の相場というものだ。

さて世の中でスピードとくれば、写真のプリントか蕎麦屋の出前か、塔の建設あたりだろう。塔とくればもちろん、バベルの塔だ。バビル二世がロテムとちんたらコンピュータおたくしている塔ではない。聖書に名高い本家本元のバベルの塔だ。

実はおれは、あの塔がより迅速にもっと早く建設されていたら、多分天まで届いていたに違いないと思っている。べつに神サマでなくたって、いつ完成するかしれない物を下々がのろくさ作っていたら、
「ちょっと邪魔したろ」

REVIEW

と悪戯っ気を出しても仕方がない。あの時分の神サマは人間より人間臭いところが魅力だったのだから、これはもはや自然の流れと言ってもいいぐらいだ。

だからつまり、今も昔も塔の建設ほどスピードが要求されるものはないのだが、悲しいことに作っている側には、それが塵ほどにも分かっていない。

しかも、今回の小説の中で塔を立てているのは、しけた初老のオヤジときている。定年まで五年残して会社を辞め、てめえが働いて溜めた金で買った分譲地に、ひたすら毎日塔を作る。こつこつ地道に脇目も振らず、言い訳もせず管も巻かず、鉄骨を組み鋸を使う。個人的な道楽みたいなもんですから、と頭を搔き、腕時計のねじを巻いたりもする。

こういう男を、黙って世間が許すはずがないのだ。これはもう洋の東西も時代も肌の色も関係なく決まってしまった人間の業というやつである。

やってくるのは、そりゃあ様々な連中だ。

損保会社のセールス、募金目当ての女、美術雑誌の記者、宗教関係者、P T

REVIEW

A代表。おっとまだいた不動産会社の社長秘書。やや不穏なあたりでは、チェーンソーをふりかざした女から、鍋焼きうどんを食ったら口の中の皮をベロリと剥ぐ男まで、実に愉快的な面々だ。

連中の目的は、まさにたった一つ。邪魔をすること。男が機嫌良く何やらよく分からない塔を作り上げていくのをやめさせたくて阻止したくて、黙ってなんか見てもらえない。

大学生の「僕」は、男とその男の塔と周囲の人々を、ある時は傍観者として、またある時は協力者として、大抵はその塔に魅せられた者として、偶然必然的に関わりを持つことになる。

実際のところ、塔を最初に「塔」と呼んだのは「僕」だ。その「僕」のまわりには、干からびてしまったかまきりの卵や、ゴキブリがかかった蜘蛛の巣、車掌になりきった少年がいる。「僕」はビタミンの効能やバニラの黒い粒のサイズはよく知っているけれど、母親の作った海老のチリソース煮は残して平気な男だ。彼女がいて、彼女でない彼女もいておれより遥かによく電話をかけ

REVIEW

る。

そんな「僕」と男とその塔に何度となく雨が降り風が吹き、時間は流れて、クリスマスは春になる。

果たしてその塔は建つのか。そして塔の周囲につむじ風のように巻き起こる人間関係に結末がくるのか。いや何よりもまず、その塔は何のための「塔」だったのか。

おれはそれを、ここに書きたいとは思わない。知っているけれど書かないのだ。なぜなら、それこそが小説を読む楽しさだからだ。小説を読むということには、物語の結末と書き手の狙いを知る楽しさがあり、読後には「おれだけが知っているんだぜ、ふふふ」という狡い満足感が与えられる。

この楽しさと満足の到達感は、いわゆる恋愛状況にとてもよく似ている。時に飢え、時に足り、時に裏切られる。その喜びは人に知られることもなく、限りなく自己満足で、そして必ずや結末が訪れる。いい小説とは必ずどこかにそんな既視感を漂わせているものだ。だがその記憶の糸の先は常に判然とせず、

REVIEW

ぼんやりとした不安ばかりが舌にざらりと残る。それは多分、その既視感こそが人が発狂する兆しに他ならないからだろう。

だからこそ『塔の条件』を読んで、そのどこに既視感を見るか、それは人それぞれに神秘的で重要な事柄になるに違いない。

REVIEW

「岬一郎の抵抗」

半村良 集英社文庫

夏と言えば『あなたの知らない世界』である。けれど、何より恐ろしいのは『あなたの知らない世界』が『あなたのよく知っている世界』になってしまったことではないだろうか。

ある日、某研究所から有害な化学薬品が漏れ、付近の住民は目や喉に異常を訴えるようになる。植木は枯れ、命を落としたペットも出た。これは数年前に現実に起きたことに酷似しているではないか。

ここに平凡なサラリーマンでありながら、突然「神の手」=癒しの手を持った男が現れる。これも少し前に聞いたような記憶がある。そしてこの後に続く言葉が国家権力や大地震だと書いたら笑う人もいるかもしれないが、これは正真正銘、本書のストーリーである。しかし、これらの出来事を「下町人情」という膜が被うことによって、物語は全く違った様相を呈してゆく。

REVIEW

さて、超能力者とは現代人が進化した姿なのか、それとも人間の本能が顕在化しただけなのか議論が別れるところだが、どちらにしても、神か悪魔かという両極端にしか位置できないのが超能力者の悲劇である。不安定な社会を作り上げることで安定している現代人にとって、超能力者は有り難すぎて災厄なのだ。

そこで超能力者である『岬一郎の抵抗』が主題になってくる。果たしてその抵抗がどこに辿り着くか、それは悲劇でもありまた喜劇でもある。

REVIEW

「ダルトニャン物語」 A・デュマ

鈴木力衛訳 講談社文庫

夏こそ長編歴史小説を読むべき季節である。それも、痛快無比であればあるほどいい。そのころは、ムヒだけに蚊の痒みを抑えてくれるかもしれない。

さて、本書はいわゆる『三銃士』として、何度となく映画やアニメになっているから、知らない人を捜すほうが難しい有名な小説である。

物語は、夢と希望と力はあるけど金はない田舎っぺ大将ダルトニャンが、ルイ十三世のお庭番である銃士隊へ志願しようと故郷を出る場面から始まる。

その銃士隊には、ちょっと渋いアトスと伊達者のポルトスと色男のアラミスというアイドル御三家がいるのだが、田舎っぺ大将ダルトニャンには一日の内にその三人と果たしあいをするということになるという、サービス満点の出会いが待っていた。

そんなこんなで晴れて見習い銃士となったダルトニャンの敵といえは、ご存

REVIEW

知、緋の衣を着たりシュリユー枢機官とその右腕である黒マントの男ローシュフォール伯爵。もちろん由美かおる風女スパイに至っては最初から大っぴらに暗躍している。

ここにダルタニャンの家主夫婦まで入り乱れて、血湧き肉躍り鼻血ブーの冒険があれよあれよと繰り広げられるのである。

文庫にして全十一冊の小説は最初目まいを感じる程に長大だが、一端ツボにはまってしまえば恐るるに足らず。核実験すら手玉に取って平気なフランス人が読み継いでいるのだから、それ以上の説明は要らないというものだ。

REVIEW

「女探偵大研究」 キャスリーン・グレゴリー・クライン

青木由紀子訳 晶文社刊

ドメスティックな表紙と『ミステリー三百冊の女探偵七十人という威勢のいい文句に引っ掛かってはいけない。本書の真犯人は、いかにもミステリー研究書らしく、実に思いがけない所に隠されている。ズバリ、それは『フェミニズム』である。

さて、E・A・ポーのデュパンに遅れること二十三年、一八六四年の英国で、元巡査の女性を主人公にしたフィクションが生まれた。しかし一人称形式の物語であったため主人公の性別は明確ではなく、論理的に犯人を突きとめるものの逃亡され、結局報酬を得られない。まずこの物語から、男性のものである職業で失敗する女性像を本書の著者は読み説き始める。

そしてこれ以降、超人的なホームズと究極のハードボイルド探偵サム・スペードを基準に造られた様々な女探偵達をバツバツと斬り倒してゆく。

REVIEW

つまり、男性の価値観が基盤となっている社会で、大衆小説であるミステリーでは女探偵は必ず結婚か仕事を迫られ続け、逆に男探偵は常にその両方を得る。この法則は近年の女探偵大流行でも全く変化がない。唯一及第点を与えられるのは、フェミニスト探偵を自認するV・I・ウォーショースキーだけだが、その彼女も男性主義である体制の手に犯人を引き渡すことで点を下げられてしまう。

だったら、もう必殺仕事人しかないな、という感想を残して終わる、良くも悪くもフェミニズムの陥穽に満ちたミステリー研究書である。

REVIEW

「性の民族誌」

須藤健一 / 杉島敬志編 人文書院刊

様々な禁忌の中で、もっとも普遍的な扱いを受けているのが近親相姦だと言われる。

数多くの性の禁忌を集め論考したこの本でも、近親相姦の禁忌が詳しく紹介されている。登場するのはケニア・インド・ミクロネシア等の人々から類人猿まで多種多彩で、近親相姦の他現在も効力を持つ多くの禁忌が調査されている。

例えば不貞をはたらいた罪としてのアマサンギアは簡単に人を殺し、性交に関する言葉の神秘力で土地紛争を仕掛ける人々がいる。

また女性の品行に男性の名誉がある社会があれば、幼い頃から女性の性交渉を奨励する社会があり、果ては妊娠に男性性器の役割を重要視しない部族さえある。

REVIEW

これほど雑多な人々が、近親相姦に関しては、共通して否の姿勢を示す。この態度は人類創世の神話を近親結婚から始める部族といえど例外ではない。

しかし、なぜ近親相姦を忌み嫌うのか、明確な答えは得られていない。定住農耕社会が作った婚姻 = 女の交換 = ヒトの再生産という図式が、生物学的にも経済学的にも、近親婚を不毛な性にしたという説明はある。

だが今現在でも、禁忌を越えた誘惑として、近親相姦に取り憑かれた人々は多い。事実、姉妹をレイプするチンパンジーのオスから、養父と養女の性交を避けるニホンザルまで、その混乱は類人猿にまで及んでいる。

ようやく誕生を迎えた性人類学に、めざましい躍進を望む。

REVIEW

「浮上せよと活字は言う」

橋本治 中央公論社

私はほとんど魚を食べない。

貝類もまず駄目だ。人にそれを告げると、大抵「なんて勿体ない」が返ってくる。みすみす人生の半分を損してる、と言うのだ。そしてまた私は、古今東西の名著と言われるものを読んだことがない。シェイクスピアも近松もフォーコーもみんな等しく知識ではない。これもまた、人生の半分を棒に振っている、とお叱りをうける事柄だ。

ということはつまり、私は既に人生の丸々全部を失いながら生き長らえているという訳だ。このように存外器用で無知な私を、著者は腹は立てても決して断罪はしない。あまつさえ「啓蒙さるべき人間」という称号を与えてくれる。それは私が自分の無知を知っているからだ。

なるほど私は魚の名前を知らない。そしてまた『テンペスト』の冒頭を暗唱

REVIEW

できない。

けれども、いつかはそれらを身の内に取り入れたいと思っている。決して無関心ではないのだ。事実、厄年を過ぎたら魚食を始めようかと考えているし、市立図書館の文学全集の位置もきちんと把握している。私に必要なのは、今一步の啓蒙に他ならないのだ。

だがしかし、啓蒙を知らないのは啓蒙すべき側だって同じだと著者は嘆く。だからこそ、JJやPOPEYEの功罪を詳述しながらも、出版界のお粗末ぶりに鞭を当てることを忘れない。このあたり、本書が文化十字軍と銘打たれる所以だろう。

それにつけても、頭のいい人が書いた本を読むのはとても気持ちがいい。

REVIEW

「夏への扉」 ロバート・A・ハインライン

福島正実訳 ハヤカワ文庫

夏はやっぱりSFである。なぜなら、たいていの人が暑さで頭がくらくらしているから、少しばかりSFに毒された発言をしたとしても変人扱いされずに済む。その上に「冷凍睡眠」がテーマときたならば、これはもう夏に読むしかないSFの最右翼である。

さて、物語は至って簡単である。主人公ダニイは優秀なロボット設計技師だが、姦夫姦婦に騙されて、会社は追い出される恋人（姦婦のことね）には逃げられる、親友（姦夫のことね）はなくすという散々な目に遭いアル中が高じて、ついに愛猫と共に30年の冷凍睡眠に入ることを決めてしまう。で、すったもんだの揚げ句、目が覚めたらそこは西暦2000年のロサンゼルス。月世界定期便が双子座流星群のため空中に待機し、白人が黒人のリンチに遭い、人工受精母性団体が賃上げ要求のための組織を結成するような世の中だった。

REVIEW

ところで、30年の眠りから覚めた後、あなたなら社会に対してどんな質問をするだろう。

われらがダニイはなかなか気のきいたことを尋ねているから、ぜひ文中で捜していただきたい。

約40年前に書かれた本書はSFの王道タイムマシン物の一つである。本書で描かれた未来と、すぐそこまで来た本当の未来を比べて過ごすのも、なかなか楽しい時間旅行ではないか。

仁川高丸

「すばる」集英社・「本の旅人」角川書店に寄稿したものに加筆修正しました

REVIEW

書評「夏への扉」「女探偵大研究」
など全8編



2001年7月29日 Ver1.0.0

著者	仁川高丸
発行所	Paper * Back * Factory http://paper.honesto.net/ paper@honesto.net
P D F	Adobe Acrobat 4.0

© Takamaru Nigawa 2001

購読者本人が楽しむ目的以外の印刷と、
一切の複写、複製、貸与を禁止します。

REVIEW